

## メッセージアウトライン マタイの福音書8：14～17 「病を背負われるキリスト」

[14]「それからイエスはペテロの家に入り、彼の姑が熱を出して寝込んでいるのをご覧になった」

イエスはマタイ5~7章で弟子たちや多くの人々に山上の説教を語られ、山を下りて来られると、ツアラアトの病に冒されていた人を癒された。(8:2~4)、そして、その後で百人隊長のしもべが中風になっていたのを癒された。(8:5~13)

そしてこの14節では「それから…」とあるので、時間的にそのすぐ後で、と考えられる。しかし、他の福音書の並行箇所と比べて見てみると、各出来事について時間的に前後に並べ替えなければならないと思われる。それは各福音書の記者の執筆目的により主題ごとに編集がなされているためと思われる。イエスの誕生と預言の成就、メシアとしての力あるわざ、病人の癒し、弟子たちへの教え、群衆に対する教え、たとえばなしとその意味、パリサイ人、律法学者たちとの対立、十字架への苦難の預言、十字架の死、死よりの復活、弟子たちへの現われ、福音宣教の命令等々様々な主題があるが、各福音書記者たちは初めから終わりまで完全な時間的順序に従って書いているのではなく、読者のために主題ごとに内容を取捨選択してまとめていると思われる。

＜ここに至るまでの時間的順序＞

1. 山上の説教→マタイ5~7章、ルカ6:20~49
2. ツアラアトに冒された男の癒し→マタイ8:2~4、マルコ1:40~45
3. 百人隊長の信仰とそのしもべの癒し→マタイ8:5~13、ルカ7:1~10
4. 安息日に会堂に入り、人々を教え、悪霊を追い出す→ルカ4:31~37、マルコ1:21~27
5. 会堂を出てシモン・ペテロとアンデレの家に入り、姑の熱病を癒された→ルカ4:38~39、マタイ8:14~15、マルコ1:29~31
6. 安息日が終わると多くの病人や悪霊につかれた人たちが連れて来られて癒された  
→マタイ8:16、マルコ1:32~34

なぜなら口伝の律法により安息日には人は決められた距離(二千キュビト…約900メートル)しか移動できなかつたからである。

安息日に会堂に入り、人々を教え、悪霊を追い出す出来事はこのマタイの

福音書では記されていない。しかし、会堂を出てその同じ日にイエスはペテロの家に入られた。彼の家は会堂からそれほど遠くない距離にあったのであろう。シモンが彼の本名でペテロは「岩」という意味でイエスが最初に彼と出会った時、彼の性格と今後の働きを見抜いてそのように呼ばれた。→ヨハネ1:40~42 ペテロに姑がいたということは彼には妻がいたということであるが妻の名前は記されていない。ここではイエスの働きに関する重要なことのみが焦点が当てられていく。

イエスはカペナウムには自分の家がなく、ペテロの家を活動の根拠地としておられたようである。安息日に礼拝を守り、ペテロの家に帰ってみるとなんと彼の姑が熱を出して寝込んでいるのをご覧になった。ルカ4:38では「ひどい熱で苦しんでいた」と書かれている。

当時この地方ではマラリア蚊が繁殖することが知られており、「ひどい熱」という症状から見ても、これはマラリア熱であったと思われ、死に至ることもあった。

[15]「イエスは彼女の手に触れられた。すると熱がひき、彼女は起きてイエスをもてなした」

高熱に襲われていた彼女の体力の消耗ぶりは大変なものであったに違いない。普通の医者なら、まず体温を下げる処置をし、投薬(植物由来の成分を用いた治療法があったと思われる)をして、時間をかけて体力の回復をはかるであろう。

しかし、イエスは彼女を見られると、彼女の手に触れられた。するとなんと熱がひいたのである。ルカ4:39では「イエスはその枕元に立って熱を吐りつけられると、熱がひいた」と書かれている。イエスの治療はすぐに患者の熱を下げ、さらに寝床から起きてイエスをもてなすほどの完全なものであり、これは奇跡であった。イエスの回りにはペテロはもちろん、アンデレ、ヤコブ、ヨハネといった弟子たちもいたであろう。→マルコ1:29

こういった人たちに対して彼女はもてなしをしたのである。彼女はイエスに対して、そして弟子たちに対して何かをせずにはおられない喜びがあふれていたであろう。

ペテロの姑は死線をさまよっていた状態から、再び与えられた健康をもって喜びつつイエスに仕え、人々をもてなした。

私たちは創造主なる神によって人として創造され、いのちを与えられ、神に従い、神のすばらしさを知り、喜ぶように造られた者であるが、最初に創造された人間アダムが自ら神のようになろうとして罪を犯し、神によってのろわれ、死すべき存在となってしまった。それ以来人間は聖なる神の前に罪

ある存在となり、この世において死と滅びの死線をさまよい、神の前にさばかれて滅びに行かなければならない者であるが、ただ一方的な神の愛とあわれみによって死に至る病からの救いの道が用意された。そのために罪のない神の御子イエスは、この世に人となって来て下さり、私たちが受けなければならない神のさばきを十字架にかかって身代わりに受けて下さり、私たちが神に返すことのできない罪のないきよいのちを代わりに献げてくださった。そしてイエス・キリストの十字架の死は私の罪の贖いのためであったと信じ受け入れる者は救われる道を開いてくださった。これが聖書の教える福音であり神の救いのご計画なのである。

[16-17]「夕方になると、人々は悪霊につかれた人を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって悪霊どもを追い出し、病気の人々をみな癒された。これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。『彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った。』」

当時の一日は日没から次の日の日没までと定められていたので、安息日の夕方（日没）は暦の上では翌日となる。それゆえ遠方からペテロの家に来て、律法を破ったことにはならない。それで多くの悪霊につかれた人や病気の人々を家族や友人などがイエスのもとに連れて来たのである。そして彼らの願いにこたえて、イエスはご自分のことばをもって悪霊につかれた人々からは悪霊を追い出され、病気の人々はみな癒されたのである。イエスは病の癒しは色々な方法でなされるが、悪霊につかれた人からはその権威あるみことばによって悪霊を追い出されている。→マルコ5：8、マタイ17:18

このようにイエスに助けを求める人で拒まれる者は一人もいなかった。もちろん法外な金銭を要求されるとか、門前払いを食わされる人もいなかった。→イエスは「病気の人をみな癒された」イエスの癒しのみわざは無代価の神の恵みなのである。

17節でマタイは預言者イザヤのことばを引用している。「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った」これはイザヤ書53章4節のことばである。イザヤはBC8世紀にイスラエルの南王国ユダで活躍した預言者。特に52：13～53：12まではイエス・キリストが地上に人として来られ、十字架に至る苦しみと死と復活によって人間の罪の贖いをなされる的確な預言がなされている。これはイエスこそ真の救い主であることを知らせるための預言である。

イエスのもとに来た悪霊につかれた人や病人がみな癒されたことをマタイはイザヤ53:4のことばを引用して、そのことばが成就するためであったと言う。イエスのこのような働きは、まるでご自分が病気になったかのように人々の苦しみや悲しみ、悲惨さを深い同情心と理解をもって実感しておられ、

日が暮れて夜になってもご自分の疲れもいとわず、自分のもとに来た人々をみな癒すために、自分がその病や疲れ、悲しみを引きかぶっているように見える。そのイエスの姿に、「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った」という預言の成就を見ているのである。

そしてまたその預言はイエスが私たちの罪のために十字架の死において、罪の結果である死そのものを文字どおり身に負われることも示しており、また今も病や苦しみの中にいる人々に対しても同じ思いをもって慰めてくださるお方であることを教えている。

この地上の死のかなたには永遠のいのちか永遠の滅びかのどちらかが待っていることを聖書は教えている。

そして滅びではなく、永遠のいのちに至る道をイエスが十字架において私たちの罪を負い、死なれることによって開いてくださったのである。

この神の御子イエス・キリストを自分の救い主と信じる者は救われ、永遠のいのちをいただく。これが聖書が教える救い、福音なのである。

シモン・ペテロの姑を癒し、多くの人々の病を癒されたイエス・キリストこそ私たちの真の救い主である。このイエス・キリストに私たちは心からの喜びと信仰をもって従い続けたい